評価・評定について

１．　評価（単元・学期ごとの評価）

適正な評価を実施すために、評価規準に示される資質や能力を評価するのにふさわしい評価場面や評価方法を選択する。

《主な評価方法》
□ワークテスト
　問題と評価の観点との関連を確実に把握したうえで、評価規準の実現状況を分析的に把握する。
□観察や対話
　活動の様子の観察、ノート、面接等を通して、評価規準の実現状況を分析的に把握する。
□作品の評価
　作文、小論文、レポート、作品等を通して、評価規準の実現状況を分析的に把握する。
□実現（実技）の評価
　口頭発表、演奏、演技、操作等を通して、評価規準の実現状況を分析的に把握する。

《主体的に学習に取り組む態度の評価について》
授業や面談における発言や行動等を観察するほか、ノートやワークシートへの記述、レポートの作成、発表といった学習活動など各教科等の学習活動に対する取組、生活における学習の活用、応用等を通して評価することが考えられる。その際、授業中の挙手や発言回数、ノートの提出回数といった表面的な状況に着目することにならないように留意する。

・学習時の発言、話合いの内容、作業の速度、プリント等の理解度、ノートの内容、作品等、授業時間の中で児童の学習状況を把握していく。その中で支援が行われ、理解が進む児童と容易に進まない児童が出てくるが、できる限り支援を行う。

・評価の観点の項目についての基準は、下記のように考えるものとする。
　A：規準に十分到達し、それ以上の学習成果を発揮したり、主体的に取り組んだりする。
　B：おおむね規準に到達している。
　C：規準に到達するまでに、もう少し努力が必要。

・ワークテスト、ワークシート等、数値で評価する場合は、90%以上をA、70%～89%をB、69%以下をCとすることを基本とするが、教科や学習内容、学年により多少の変更がありうる。また、これまでの学習過程での評価と照らし合わせた上で、学年で確実に共通理解し、評定を行う。

・学習中に得た評価結果の積み重ねが、それぞれの観点で同一なら総括も同じにする。（AAA→A）

・それぞれの観点で評価結果が同じでない場合は、出現率の高いものを重視しつつ、単元あるいは題材の観点別の評価規準と照らし合わせ、総括的に評価する。単元において観点に重みを付ける場合もあるため、単純化して総括することがないよう、十分に考慮する。

２．　学年末の評価

観点別学習状況の評価とは、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして、学習の実現状況を観点ごとに評価して、児童の学習状況を分析的にとらえるものです。

評定は、学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、各学期の観点別学習状況の評価の結果を学年末に総括するものとしています。

【学年末の観点別学習状況の評価の総括】

（１）観点別学習状況の評価の表示

・観点別学習状況については，現行の指導要録と同様次のように３段階で評価する。

Ａ：十分に満足できると判断されるもの
Ｂ：おおむね満足できると判断されるもの
Ｃ：努力を要すると判断されるもの

（２）観点別学習状況の評価の総括

・各学期の評価結果が同じ場合は、学年末の総活も同じ評価にする。

	１学期	２学期	３学期		学年評価
知識・技能	A	A	A	→	A
思考・判断・表現	B	B	B	→	B
主体的に学習に取り組む態度	C	C	C	→	C

・それぞれの観点で評価が同じでない場合は、出現率の高いものを重視しつつ、学年の目標や学年お評価の観点の趣旨と照らし合わせて総合的に評価する。単元に置いて観点に重みを付ける場合もあるため、単純化して総括することがないよう十分に考慮する。

【評定について】

（１）学年末における評定の表示

・評定については、下記の３段階で評価をする。

３：十分に満足できると判断されるもの
２：おおむね満足できると判断されるもの
１：努力を要すると判断されるもの

（２）学期末における観点別学習状況の評価と評定の総括

・総括した３つの観点の評価により、下記のような評定をすることを基本とする。

A	A	A	A	A	A	B	B	B	C
A	A	A	B	B	C	B	B	C	C
A	B	C	B	C	C	B	C	C	C
A		B※						C	
3		2※						1	

※ただし、上記の評定を基本とした上でそれぞれの観点で評価が同じでない場合は、出現率の高いものを重視しつつ、学年の目標や学年の評価の観点と趣旨とを照らし合わせて総合的な評定を行う。